

師匠たちと弟子たち
Мастера и Подмастерья



師匠たちと弟子たち
Мастера и Подмастерья (1923) V・カヴェーリン (沼野充義訳) 月刊ペン社 (5/25刊・¥1500)

二〇年代のソビエト・ロシア文学は、無数の可能性に富んだ、絢爛たるものだった。アンチユートピア小説『われら』のザミアーチン、あるいは、ブルガーコフや、ペールイなど特異な才能の溢れた時代だった。本書の著者ヴェニアミン・カヴェーリンも、そんな一人である。長い冬の時代が過ぎるうちに、多くの作家や作品が失われたが、カヴェーリンは、以来六十年近く活動を続け、今でも現役の作家である。

『師匠たちと弟子たち』は、一種の実験小説集だ。木から作られた指物師の息子「指物師たち」、ゲームに興じる四人の男たちの逆説的結論「盾(と蠟燭)」、バラバラなプロットの中に作者自身も登場する「ライブチヒ市年代記一八××年」——他三篇を含め、舞台背景を別にすれば、現代の小説といって、通じるかもしれない。同じような話が、ジョン・バースや、『ユーモア・スケッチ傑作選』に、ありそうな気がする。六十年を経た本書と、これらの作品を、『メタ・フィクション』に、まとめられることもできるだろう。時代を越え、どこか共通する部分があるところに、本書の超越性があるようだ。